

記者懇談会の記録

| | |
|-----|-------------------------------------|
| 日 時 | 令和 2 年 12 月 3 日 (木) 15 : 30~15 : 53 |
| 場 所 | 岩見沢市役所 水道庁舎 4 階 会議室 |
| 記者数 | 8 人 |

1 いわみざわハート&アート 2020 の開催について

(市長)

障がいのある方の芸術作品を集めたこのアート展は、今年で 11 年目を迎えます。当初は 9 月にいわみざわ百餅祭と時期を合わせて開催することを予定していましたが、今年度は 12 月 16 日から 20 日までの 5 日間、岩見沢市文化センターまなみーるの展示室で開催します。毎年 100 点以上の作品が寄せられており、今年もたくさんの作品をお楽しみいただけることと思います。ただ、今年度は、新型コロナウイルスの影響によりオープニングセレモニーは行わないこととし、会場ではマスク着用の徹底や消毒などの感染症対策を講じ、皆さまに安心して作品を鑑賞していただけるように十分配慮します。また、去る 10 月には、「障害者の文化芸術フェスティバル in 北海道ブロック」において、オンラインでの舞台配信やドライブインシアター形式でのバリアフリー映画上映など、新しい生活様式の中での芸術文化の楽しみ方をご提案したところ。 「障害者の文化芸術フェスティバル」のアール・ブリュット展につきましては、市内 4 条西 3 丁目の「岩見沢アール・ブリュットギャラリー」において 12 月 20 日まで開催しておりますので、是非こちらもお楽しみいただきたいと思っております。新型コロナウイルスの影響は依然として続いておりますが、このような芸術文化の取り組みにより、障がいのある方への理解が深まり、多様な人々が自分らしく暮らすことができるインクルーシブな社会（注 1/最終ページ参照）が実現することを期待しているところです。

< 質疑応答 >

(北海道新聞)

今年展示される作品の数とそのコンセプトなど、今年の特徴があれば教えてください。

(市長)

作家の皆さんの感性を表した作品を 1 点でも多く展示したいと考えています。展示する作品数は各事業所と打ち合わせているところですが、例年だと 150 点前後、多いときには 190 点くらいの作品を展示してきました。今年もできる限り展示して、多くの皆さまに鑑賞していただきたいと思っています。

(プレス空知)

会場は、まなみーる文化センターの展示室だけですか。

(市長)

はい。展示室だけです。

(プレス空知)

展示室には窓もなく、出入口は1つしかありません。新型コロナウイルス対策としての工夫はありますか。

(市長)

手指消毒とマスクの着用、ソーシャルディスタンスの確保といった、会場内での3密を避ける対策を、受け付けの段階からしっかり取り組んでいきたいと考えています。

(プレス空知)

ある程度の上限を決めた入場制限は行いますか。

(市長)

入場者数の状況を見ながら、適切に対応したいと思います。

2 新型コロナウイルス感染拡大防止に向けた周知について

(市長)

国内の新型コロナウイルスの感染がまだ拡大しています。道内では今日で29日連続で100人を超える感染者が確認されています。岩見沢市でも11月に入ってから、北海道中央労災病院と有料老人ホームでクラスターが発生しており、まだ収束の宣言が行われていません。岩見沢市は北海道と連携し、感染拡大防止と集団感染の早期収束に向けて全面的な協力と支援に取り組んでいるところです。このような中、北海道の新型コロナウイルス感染症の拡大防止の集中対策期間が12月11日まで延長されたことを踏まえまして、皆さまへ改めてお願いしたいと思います。まず、マスクの着用や手洗いができない、換気ができない、人との距離が十分に保てないなどの感染リスクを回避できない場合には、札幌市との不要不急の往来を控えてください。特に感染リスクの高い飲食の場面では、飲食時以外でマスクを着用し、5人以上での会食を控え、長時間に及ぶ飲食や大声を控えるなど、引き続き感染防止対策の徹底と継続をお願いします。また、冬期間の換気の方法については、厚生労働省で作成したチェックリストとチラシを使い、庁内や学校、施設、関連団体などに11月27日に周知したところです。市立総合病院では、11月12日の職員の感染に伴い、外来診療、定期手術などを一部制限し、皆さまには不便をおかけしましたが、幸い他の方への感染には至らず、11月30日から通常の診療体制に戻すことができました。さらに11月2日から診療を開始した小児用の発熱外来に加え、12月1日からは成人向けの発熱外来の診療を開始するとともに、入院患者と直接お会いすることができない方がインターネットを使用して面会することができる「リモート面会サービス」を開始したところです。最後に、新型コロナウイルス感染症は、誰もが感染する可能性があることをご理解いただき、差別や偏見が生じないよう、皆さまのご協力を改めてお願い申し上げます。

< 質疑応答 >

(北海道新聞)

市立総合病院のリモート面会サービスの利用件数はどのくらいですか。

(市長)

面会日の3日前までにご予約していただくことにしていますので、利用はまだありません。

(北海道新聞)

予約の受け付けを始めたのはいつですか。

(市長)

12月1日からです。

(北海道新聞)

それだと、最速でも12月4日の面会になりますね。

(市長)

そうですね。(病院管理課長に対して)すでに申し込みは来ていますか。

(病院管理課長)

いえ。予約はありません。

(市長)

新型コロナウイルスの影響でお見舞いや面会が全くできない状況で、入院している方々やご家族にとって不安でしょうから、このサービスを利用してコミュニケーションを取れば良いと思います。

(北海道新聞)

ご家族からの要望があったのでしょうか。

(市長)

入院している方からの声があったと思います。また、市立総合病院に限らず、どの病院でも面会ができないという話は、ご家族から直接お聞きする機会がありましたので、リモートによる面会を実現する体制を取りました。(病院管理課長に対して)今、面会は認めていますか。

(病院管理課長)

原則お断りしています。

3 その他の質疑応答

地元事業者や飲食店に対する支援

(北海道新聞)

小規模事業者等経営サポート給付金は、担当課にお話を伺ったところ、11月末時点で特別加算も含めて想定の6割程度が申請されている状況であるとのことでした。特に影響があった飲食店や宿泊業の申請の割合が高いともお聞きしました。流行の第3波が到来した中で、年末年始の営業が思うようにならない飲食店は市内でも多いと思われます。このような状況で今後、市として

地元事業者や飲食店に対するサポートや支援をどのようにお考えですか。

(市長)

小規模事業者等経営サポート給付金は、業種を問わず、飲食店や宿泊業といった特定の業種には加算して、これまで実施し、その利用が約6割という状況です。ここに来て、集中対策期間が延長となったことで、飲食店などへの影響が強くなってきていると思います。当初から申請期間を国よりも長くしましたが、商工会議所などと改めて意見交換する予定です。このような状況をしっかりと踏まえ、必要な対策を速やかに実施したいと考えています。

(北海道新聞)

流行の第1派の時期よりも現在の方が深刻な状況だという声を非常に多く聞きます。年を越せないのではないかという話もあります。そこで支援するとなると、想定されるのは今までと同じ給付といった形ですか。

(市長)

いくつか考え方があってと思いますが、基本的には前年同月と比べて20%以上のマイナスという要件で、速やかに申請していただけるように、ということなのですが、オプションの1つとして、さらにそれを加算していくのか、あるいは新たな要件を加えて、時期を限定して対策していくのか、このようなことも念頭に置きながら、しっかりと状況を把握して対策したいと思います。

記者会見を開催する目安や基準

(読売新聞)

新型コロナウイルス関連の記者会見を開催するに当たっての目安や基準を教えてください。

(市長)

特に目安などはなく、例えば、市職員の感染が確認された時、クラスターが発生した時など、個別に状況を把握した上で会見を開くということになります。

市立総合病院での面会

(朝日新聞)

入院患者がご家族と面会できなくなったのはいつ頃ですか。

(病院管理課長)

新型コロナウイルスが流行し始めた当初、3月からになります。

(朝日新聞)

資料に「様々な理由で入院患者さまと直接お会いすることが出来ない方へ」とありますが、人によっては面会できているのですか。

(病院管理課長)

例えば、手術する場合は患者さんとご家族一緒に説明することになります。

(朝日新聞)

それは面会というよりも手続き上で、ということですね。資料にある「様々な理由」には、新型コロナウイルスの感染も該当しますか。

(市長)

新型コロナウイルスの陽性者に限らず、すべてお見舞いできない状態になっています。市立総合病院に限りませんが、葬儀に参列させていただいた時に、最後を看取ることができなかったとか、お見舞いに行けなかったなど、そういった声をよく聞きました。

アール・ブリュットギャラリー

(北海道新聞)

市内中心部の店舗を活用した「アール・ブリュットギャラリー」(4条西3丁目)について、来年度以降の考え方を教えてください。

(市長)

基本的には予算編成の中でしっかり議論しますが、非常に良い取り組みの一つだと思っています。岩見沢市は共生のまちづくりということで、障がいのある方もない方も共に地域の中で暮らしていくことができる暮らしやすさを追求しています。このような観点で、アール・ブリュットの作品に触れる機会をできるだけ多くしていきたいと考えています。ギャラリーでは、全国の作家さんの作品を4期に分けて紹介をしています。その内容も含め、来年に向けてどう取り組むかということはこれからしっかり検討したいと思います。また、市内の作家さんなどの作品は、いわみざわ健康ひろばや市役所本庁舎でも展示していますので、できるだけこのような場を確保したいと思います。10月に開催した「障害者の文化芸術フェスティバル in 北海道ブロック」はオンラインで開催しましたが、多くの方に興味を持っていただき、オンライン配信は2日間で約1,800人に視聴していただきました。ギャラリーの作品も今まで約350人の方に見ていただきました。10月3日からの1か月間、絵画ホール・松島正幸記念館(「わたしの家、わたしの町」というイベント)では約400人に見ていただきました。このようにいろいろ興味を持って見ていただける機会ができたと思っていますので、さらに取り組みを着実に進めたいという思いがあります。

コロナ禍でのコミュニケーション

(北海道新聞)

新型コロナウイルスが流行する前、市長は関係団体等の会合などで業界や市民活動についての意見や要望などを聞く機会があったのですが、コロナ禍では、その会合ができず、意見や要望などを聞く機会がなかなかないのではないかと思います。この状況の中で、市民や団体とのやり取りをどのような形で行っていますか。

(市長)

新型コロナウイルスの影響で会合がほとんどなくなり、皆さんと直接的なやり取りができなかったことを私は非常に残念に思っています。ですから、会議などがあればできるだけこちらから出席させていただき、状況の確認をさせていただくことはあります。ただ、圧倒的にその機会がないものですから、皆さんからご意見などがあればしっかりお聞きするようにと、担当職員に話をしています。当面、この状況が続くのかなと思っています。例えば、市政地区懇談会は毎

年 20 回程度開催し、市民の皆さまのお話を直接聞く機会がありましたが、今年 2 月以降は 1 回も開催できていないのが現状です。やはり「リアルな場」が必要だと思います。テレワークやオンラインなど方法はいろいろありますが、職員に市民とのコミュニケーションをできるだけ取るように、と勧めています。この先の目途が立ちませんが、新型コロナウイルスの感染が落ち着いて、一日も早く以前のようなノーマルな状態になることを願っているところです。

(注 1) インクルーシブな社会とは、社会を構成するすべての人は多様な属性やニーズを持っていることを前提としながら、性別や人種、民族や国籍、出身地や社会的地位、障がいの有無など、その持っている属性によって排除されることなく、誰もが構成員の一員として分け隔てられることなく、地域で当たり前存在し、生活することができる社会をいいます。

(注 2) この記録は、重複した言葉遣いや明らかな言い直しがあったものなどを整理した上で作成しています。(作成：総務部秘書課広報係)